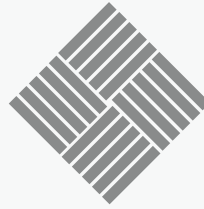


組紐・組物学会 ニュースレター

The Kumihimo Society Newsletter



Volume

4

Number

1

2013年8月25日

組紐・組物学会行事（終了分）

2013年 5月11日（土） 10:30～16:00	第1回東京ワークショップ&レクチャー「硬い素材で組む」岡安康子
2013年 5月24日（金） 10:00～16:00	第1回京都ワークショップ&レクチャー「高台」廣澤徳三郎 「プライ・スプリット」多田牧子・猪田宮子
2013年 5月25日（土） 10:00～16:00	第2回シンポジウム「組紐—美しくそして強く」京都工芸繊維大学
2013年 5月26日（日） 13:00～16:00	第2回京都ワークショップ「綾竹台の紐をプレートで組む」小嶋博子
2013年 7月13日（土） 10:30～16:00	第2回東京ワークショップ「綾竹台の紐をプレートで組む」小嶋博子

目次 Contents

2	組紐—美しくそして強く	第2回組紐・組物学会シンポジウム報告	魚住忠司
5	第3回作品・製品展示会		
6	高台の組紐		多田牧子
8	組紐・組物学会関連行事予定		

In this issue

Kumihimo - Artistic and Mechanical Impacts	Tadashi Uozumi	2
Third Exhibition of Kumihimo and Related Products		5
Takadai Braids	Makiko Tada	6
Forthcoming Kumihimo events in and outside of The Kumihimo Society		9

組紐・組物学会ニュースレター

第4巻第1号 2013年8月25日発行

編集・発行 組紐・組物学会事務局 京都工芸繊維大学大学院

伝統みらい教育研究センター内 〒606-8585 京都市左京区松ヶ崎御所海道町

TEL/FAX : (075)724-7844 E-mail : inoda@kit.ac.jp

本印刷物と同じ内容は学会のWebでもご覧になれます。 <http://www.kumihimo-society.org>

組紐一美しくそして強く

第2回組紐・組物学会シンポジウム報告

Tadashi Uozumi

魚住忠司



はじめに

本学会の「第2回組紐・組物学会シンポジウム」が5月25日（土）に、前回と同じ京都工芸繊維大学60周年館で開催されました。今回のシンポジウムは約120名の参加者と下記のプログラムで行われました。

基調講演「複合材料の強化形態としての組紐」 仲井朝美
一般講演（産業および複合材料分野）

「組紐 CFRP の作製機構の開発」 魚住忠司

「学生フォーミュラへの組紐複合材料の活用」 岡本和也
一般講演（伝統・文化・歴史分野）

「アンデスの組紐とその探訪の旅」 青柳淑枝

「創作の組紐・ゆるぎ組系組紐」 石井奈々

「お龍さんの帯留めから—帯留・帯締・下緒」 岡本睦子

「非直線的な高台の紐」 清澤澄江

CFRP デザインコンテスト 大谷章夫（進行）

懇親会

午前中の3件の講演は、一般講演、基調講演とも産業お

よび複合材料分野に関するもので、午後の4件の一般講演は伝統・文化・歴史分野に関するものでした。産業分野と伝統分野の講演の間に行われた「CFRP デザインコンテスト」は、産業分野と伝統分野との融合を狙った前回にはない新しい試みとなりました。以下に基調講演と一般講演の内容、CFRP デザインコンテストと懇親会の模様を報告します。

基調講演

仲井朝美副会長（岐阜大学）による基調講演は「複合材料の強化形態としての組紐」と題し、ボーイング社の新型旅客機「787」にも使用されている炭素繊維強化複合材料の解説を行いました。組紐で作られた組紐複合材料の特徴が紹介され、日本の伝統的な繊維加工技術である組紐・組物技術が繊維強化複合材料の分野において非常に重要な役割を担う可能性を秘めていると、締めくくりました。



図1 仲井朝美副会長（岐阜大学）による基調講演



図2 筆者による一般講演 司会は圓井良理事



図4 青柳氏による一般講演

一般公演（産業および複合材料分野）

筆者による「組物 CFRP の作製機構の開発」と題した発表では、組物の技術により軽く強い最先端の新しい材料が作り出され、航空機や最新の自動車の部品に使われている実例を紹介しました。これら部品は自動化された組機により制作されています、この自動化技術を応用した、T字型に分岐したパイプの開発事例の紹介をさせていただきました。

岡本和也氏は「学生フォーミュラへの組物複合材料の活用」と題して、昨年の第10回学生フォーミュラ総合優勝に続き2連勝を目指した、軽量かつ車両性能の高いマシンの実現に向けた組物応用技術（CFRP：炭素繊維強化複合材料）を紹介しました。車両前方に搭載され耐衝撃部材となるインパクトアブソーバー、吸気系パーツのリストラクターそしてドライバーがハンドルを回す力を操舵機構に伝えるステアリングシャフトに活用されている組物複合材料が紹介されました。



図3 岡本氏による一般講演

一般公演（伝統・文化・歴史分野）

青柳淑枝氏は「アンデスの組紐とその探訪の旅」と題し、青柳氏が5回訪れたペルーで直に触れたアンデスの組紐文化と、そこで手に入れた平紐の組み方の解明について発表しました。近年ほとんど作られていないとされていた平紐の現物を見つけ、その作り手と会えたのは素晴らしいことでしたが、現地で丸紐組手が手だけで組まれているのを目の当たりにし、平紐組制作の難しさを実感したとのことでした。これらの組紐は組紐ディスクを使っても難しい組み方とのことであり、ペルーではこのような組紐の作り手が激減していると報告しました。

石井奈々氏は「創作の組紐・ゆるぎ組系組物」と題し、組紐検定3級の実技試験に向け研究した創作組物について報告しました。ゆるぎ組系組物の糸のグループ内での移動順序を変えることで、様々な表情の組物作りだしました。またボタンホールのような穴のある独自性の高い組紐を考案、新しい組紐作りの過程を報告しました。

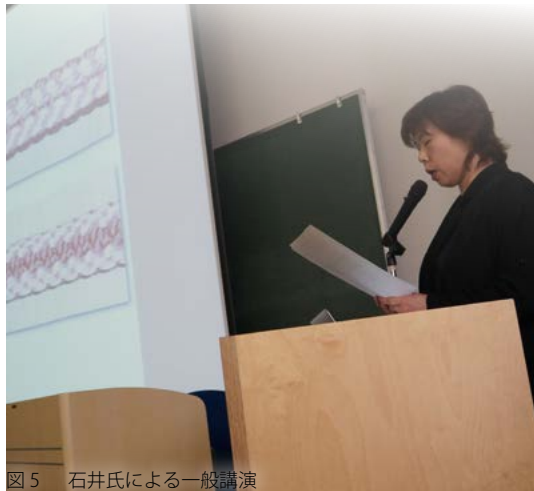


図5 石井氏による一般講演



図6 岡本氏による一般講演

岡本睦子氏は「お龍さんの帯留めから一帯留・帯締・下緒」と題し、坂本龍馬が妻のお龍に贈ったとされる帯留めのついた帯締めに興味を持ち、帯留・帯締・下げ緒について掘り下げた研究について報告しました。江戸時代後期から使われ始めた帯留は、明治の廃刀令により不要になった刀装具を帯留に転用する形で使用が盛んになり、龍馬がお龍に贈った帯留の金具は目貫で、また紐は刀の下緒で作られていたこと、また当時下緒に用いられていた組紐には甲斐口組・笹波組・竜甲組・唐組・高麗組など様々であったことなど、帯締から始まりその時代の歴史や文化にも触れた興味深い内容が報告されました。

清澤澄江氏は「非直線的な高台の紐」と題して、2012年にマンチェスターで開催された組紐国際会議での受講をきっかけに作り始めた、まっすぐではない組紐について紹介しました。初めての海外で、日本人ただ一人の中で受講したワークショップの経験により、左右が対象でなかったり、幅が狭くなったり、広くなったりする組紐に、新たな創作意欲を掻き立てられたとのことでした。紹介された作品は、筆者には「組紐、まっすぐきれいに」だけでなく「楽しく、自由に」と問いかけているようにも思えました。



図7 清澤氏による一般講演



図8 CFRPによる作品

CFRP デザインコンテスト

大谷章夫理事（岐阜大学）が進行役を務めた「CFRP デザインコンテスト」では、作品のベースとなる炭素繊維で作製された組紐が参加者に配られました。参加者は日頃触りられない炭素繊維の組紐を引っ張ったり、曲げたり、ほごいたり。みなさんのアイデアで航空機などの材料に使われている炭素繊維がリボンや花など華やかなアートに見事に変身しました。

懇親会

濱田泰以理事（京都工芸繊維大学）の乾杯により始まった懇親会では、参加者皆さんのエネルギー全開モードで、各テーブルを囲んでのにぎやかな歓談により親睦と情報交換が繰り広げられていました。上田隆久理事の司会により、前年度組紐検定試験合格者への認定証授与式、作品展とCFRP デザインコンテストの受賞者発表と表彰式が行われました。一般講演で講演した京都工芸繊維大学の学生フォーミュラのグループには、昨年の第10回学生フォーミュラ総合優勝の健闘を称え、また今年の活躍への応援の気持ちを込め奨励賞が授与されました。



図9 懇親会

第3回作品・製品展示会

2013年5月24日～26日

第2回シンポジウム会場では第3回組紐・組物学会作品・製品展示会が開催されました。

廣澤浩一、多田牧子、渡辺一生、小嶋博子の各理事が審査員となり、組紐・組物学会学会賞1名、同優秀賞2名、同奨励賞1名が24日に決定され、25日の懇親会の席上で表彰状の授与が行われました。

学会賞は古澤陽子氏の Braid-in braid 技法応用作品でした。また、優秀賞は菊川啓志氏の円形唐組&綾竹台作品と戸根絹代氏のアンデスの平組紐を唐組台で組んだ作品に、奨励賞は学生フォーミュラ・チームの業績に対して与えられました。



組紐・組物学会学会賞
古澤陽子氏



優秀賞
菊川啓志氏



優秀賞
戸根絹代氏



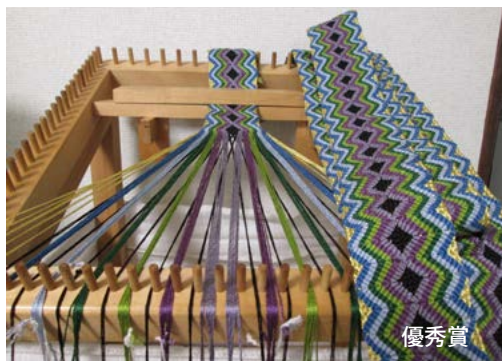
奨励賞
KIT 学生フォー
ミュラ・チーム



組紐・組物学会賞



優秀賞



優秀賞



奨励賞



作品・製品展示会場

高台の組紐

Makiko Tada
多田牧子

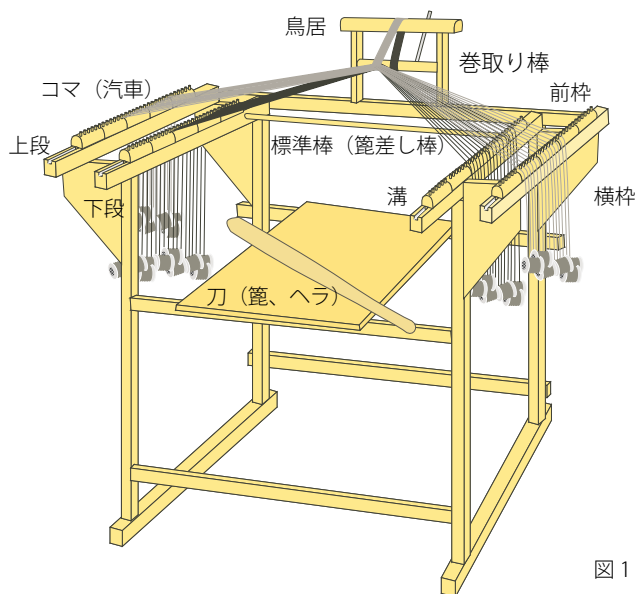


図1 高台

高台はおもに平たい紐を組むための木製の道具である。図1に高台と各部分の名称を示す。昔の組紐の職人は、自分の使い勝手が良いように道具を作ったので、大きさもそれぞれ違ったものであったが、現在は110cm四方の大高台とそれより小ぶりの中高台が市販されている。何れにしても100～150cm四方くらいで組台としては最も大きいものである。前方に鳥居の立つ前杵、両側に横杵があり、組手は空いている手前の部分から台中央に渡された板の上に座る。現在は座るための板をはずして椅子を使用する場合も多い。

前杵の鳥居には巻上げ糸を付けた巻取り棒があり、組み上がったものを巻き取ることができる。組手の両側にある横杵の腕部分には溝があり、そこにコマ(汽車ともいう)を並べる。

組糸を高台にセットするにはまず組糸をひとまとめにし、鳥居の巻上げ棒についている巻き上げ糸にとりつける。組糸がはずれないようにしっかり根締めをすることが必要である。それぞれの糸束を重り玉に巻き取る。この重り玉を付けた組糸は台左右の腕のコマの上に立つ木釘の1釘に1玉ずつ下げる。組紐の組成点から重り玉までの長さはすべて同じにする。長さが違うと絡まりやすい。また組み始めるときは一番手前の糸を置く位置を左右揃う様に注意する。

横杵の腕部分は通常左右それぞれに2段ずつある。上段か下段のいずれかを使って組むものを「一枚もの」、上段と下段を用い二枚構造を持つものを「二枚もの」と言う。上段と下段を用い一体化した組紐は「二段もの」として、二枚ものと区別する。「三段もの」

を作る場合は横杵の腕は3段ずつ必要である。

組み方を書いたものを綾書と言う。符号で書いてある場合と図面で書いてある場合がある。「二枚もの」は上段と下段の糸を入れ替えたり、手取りにより複雑な模様を組みだすことができる。

組み方の基本

1. 高台はおおむね右側から綾を取り、組み始める。
2. 並んだ組糸を手で上げ・下げの動作を繰り返し、組糸を上下の2グループに分ける。この動作を「綾を取る」と言う。この2グループの間、つまり綾の間に竹製の刀(とう)または篋(へら)を差し込む。
3. ついで標準棒(篋差し棒とも言う)の下、前杵の右上部分に通し、刀または篋を固定する。これで上下の糸の間に空間ができる。
4. 次に、緯糸の役目をする組み手から一番遠くにある右先の組糸を右手でつり上げる。
5. 左手は綾の間を通り、右手でつり上げた玉を迎えに行き、受け取り、左側の腕の一番手前に置く。この時、糸はたるませないようにする。
6. 右手で刀を持ち、標準棒と前杵の右上部分からはずし、右先の組糸が通ったように打込む。この打込み方は組紐の善し悪しが決まる非常に大切な動作である。左側も同様に行う。この動作を繰り返し組む。

1本上げ・1本下げ(またはその反対)を繰り返すと1目飛びの間組(安田組)、2本上げ・2本下げを繰り返すと2目飛びの間組(高麗組)、3本上げ・3本下げを繰り返すと3目飛びの間組(常組)となる。

「一枚もの」の場合は右側・左側と交互に組む。「二枚もの」場合はおおむね右側の下段上段、次に左側の下段上段と組む。

高台はいつ・どこで考案されたか？

組紐は、最初はループ操作、クテ打等の方法で手だけで組まれていた。法隆寺や正倉院に残されている組紐がそうである。しかし能率的に組み目を揃えてきっちり組み目のしまったものを組むことが必要とされ、そのために何らかの道具が必要となり、それぞれの組台が考え出されたものと思われる。

現在、安田組と呼ばれる組は新羅組とも呼ばれ、韓国を経て中国から伝わった組紐かとも思われるが、伝わった時点での組み方が手だけで組まれたか、高台様のもので組まれたかは解明されていない。また舶来品や舶載品の好きな日本では珍しいものや良いものには外国の名前を冠して付ける場合が多いので、必ずしも外国から伝わったものではないかもしれない。

高台の名前の由来は、高麗台の一字を取って高台としたという説と、高いところに座って組むのでこの名前があるという説、また高麗左衛門という人が考案した（京都・谷岡孝之祐氏らの伝承）からという説があり、いつごろ・どこで考え出されたかは、他の組台と同様にはっきりしたことはわかっていない。以下想像をたくましくして「高台はいつ・どこで考案されたか」を推察したい。

中国から伝来？

中国からの伝来を支持する資料としては、[Les Broderies et les Dentelles]; Mlle Marguerite Charles et M. Laurent Pages, Librairie Felix Juven（作成年月日の記載無し。本の装丁などから1900年代初期と思われる。）のP.190に中国風の衣装を着た女性が高台様の道具の前に座っている図がある。その図を図2に示す。

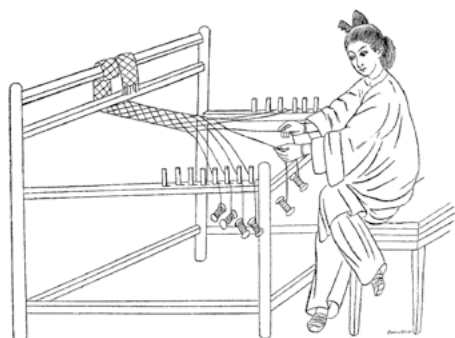


図2 [Les Broderies et les Dentelles]; Mlle Marguerite Charles et M. Laurent Pages, Librairie Felix Juven

この図については、フランス国立図書館所蔵の版画で古代中国の手仕事のレースと記されている。これは日本には中国・韓国と文化が伝来されたことを考えると妥当なことと思われる。この台と現在の高台との違いは、左右のコマ（汽車）が移動式ではないことや、巻取り棒がないことであるが、おおむね同じである。手元も現在とは違うように持っているが、秘伝だったので組み手がわざとわからないようなポーズをとったかもしれないし、描いた人の間違いかもしれない。ちなみにこの図の衣装は中国の清時代（1616～1912年）の庶民のものと思われるがいつごろからこの高台様の道具が使われていたかはわからない。

なお現在でも作られている中国雲南省の組台は簡単な背もたれのある椅子のようなもので、手元はポピンレースのように動かす。背もたれが高台の鳥居の役目をしている。高台の前身とも言えなくもない。（図3）高台では足打ち台でできるもののほとんどを作ることができるので、足打ち台の使用が少なくなってしまう前に高台が伝来したか考案されたと考えられる。室町時代後期から江戸時代初めにかけて簡単な装置の高台が伝えられ、日本でさらに使いやすいように改良されたのではと推測される。

三角台・重打台と高台

図4に三角台、図5に重打台を示す。

三角台は中国雲南省の組台とたいへん良く似た道具で、鏡の部分が発角二等辺三角形である。その短い辺の部分に組んだものを巻き上げる巻き上げ棒付きの鳥居が立っている。三つ組、五つ組など、奇数の玉数の組紐を組む時に使用する。おおむね玉数が少なく、組糸に撚りをかける場合が多いので、きれいに組むには熟練の技術を要する。現在は余り使われていないが重打台の前身とも考えられる。

重打台はおもに重打組を組む道具である。しくみは



図3 中国雲南省の組台

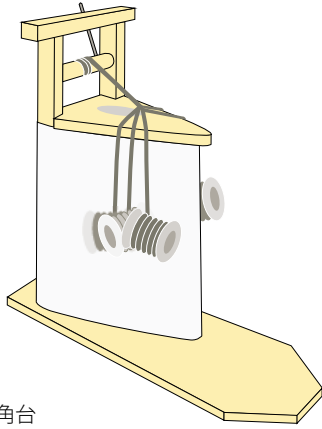


図4 三角台

高台と良く似ており、高台はこの重打台から発生したとも考えられる。組手の両側にある横枠の腕部分には突起も無く、コマ（汽車ともいう）も乗せない。三角台と同様にきれいに組むには熟練の技術を要する。組糸には撚りをかけることが多い。現在は余り使われていない。

組紐に関する国内の資料

組紐に関する古い文献様のものは少ない。養老律令の施行細則を集大成した延喜式の縫殿寮の項に組紐に関する糸量やかかる日数などの記載があるが、方法や組図は記載されていない。

木下雅子氏の『日本組紐古技法の研究』によると17世紀に描かれたとされる「千歳のうぶぎ」(Chester Beatty Library, Ireland)に高台様のもので組んでいる図が、高台の絵画資料として最古のものであるとのことである。

次にあげる「百工比照」は文献ではないが組紐の実物が残っている点で素晴らしいものである。

他に、高台の歴史で特記すべきものに「止戈枢要」がある。

「百工比照」

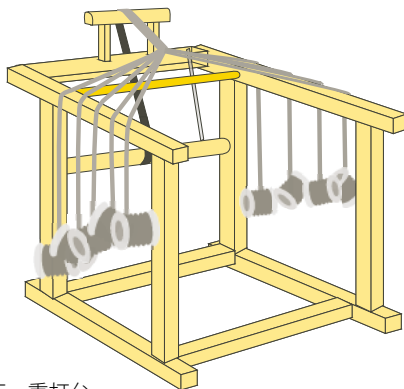


図5 重打台

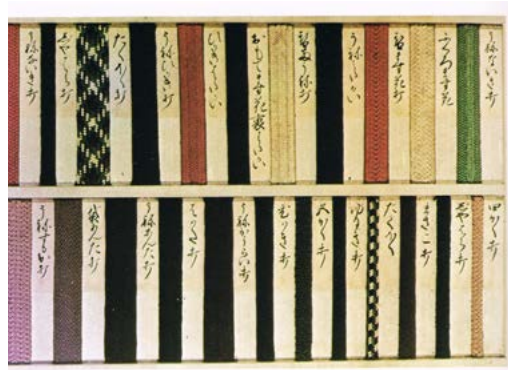


図6 百工比照

江戸時代中期 元禄年間、加賀百万石五代前田綱紀(1643～1723)の命で作られた当時の産業品の見本帳である。前田紀綱の文化・産業振興政策として加賀藩の百般の工芸工人の技術比較対照のために作られたものである。この中の紐の手鑑に101点の紐が集められている。高台で作ったと思われるものは、う弥ないき打、ふくろます花、龍虎打、貝口打、袋志け打、あんだ打などである。図6に百工比照の組紐の部を示す。

「止戈枢要」

大関増業(1782年生まれ・伊予大洲藩主の子、後、下野の黒羽藩主)が1826年頃著したと言われているもので全529巻の大著である。「止戈」とは戈(ほこ)を止めるという意味で、この2文字を合わせると「武」という字になる。従ってほとんどが武家に関するものである。機織彙編15巻・組しゅん備考3巻・彩色類巻2巻など武具生産のための組紐関係の記述がある。これは増業が命じて藩の殖産興業に役立つようにとまとめさせたものとされている。

原本は栃木県黒羽町芭蕉の館が所蔵しているもので、一部は展示してある。あらかじめ申し込みれば閲覧もできる。図7に止戈枢要に描かれた高台の図を示す。

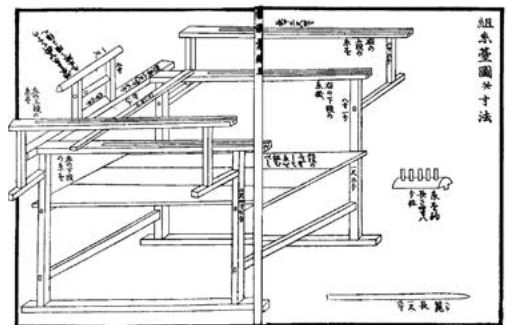


図7 止戈枢要に描かれた高台の図

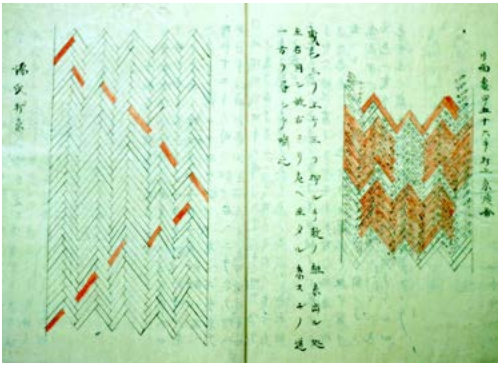


図8 高台片面亀甲の図

「組しゅん備考、巻之一」は「組之部」として、両面亀甲組（64玉）、片面亀甲、威糸打組（常組・三間組）、四間組、高麗織、左々波組、アンダ打、繁打下緒、袋打組、貝ノ口、竜虎打、竜虎鳴打、などの高台で製作する組の技法が図示されている。図8に高台片面亀甲の図、図9に高台綾書き手取りの図を示す。

また「しゅん（マルウチ）糸之部」として、源氏打・八つ打などの丸紐類や組台の詳細図が記載されている。「巻之二」は秘伝糸組として、足打ち台での組み方、「巻之三」は糸の準備やそのための道具、「糸組極秘条々深秘口訣覚」に両面亀甲組（64玉）、片面亀甲の秘伝部分と新製工夫糸組台のいろいろが記載されている。

主要参考文献

大関増業「止戈枢要」芭蕉の館所蔵 1826 頃
 Mlle Marguerite Charles and M. Laurent Pages,
 "Les Broderies et les Dentelles",
 Librairie Felix Juven 1900 頃
 道明新兵衛「ひも」学生社 1963
 菅沼・山木・太田「くみひも」民俗文化研究会 1969
 山本茂貴「ひも物語」三重県組紐協同組合 1970



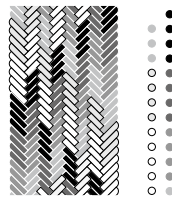
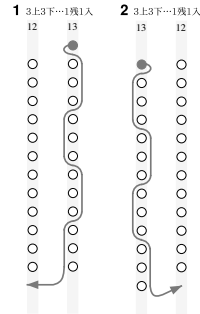
図9 高台綾書き手取りの図

常組（三間組）1-25玉

Tsune-gumi (Sangen-gumi) No.1

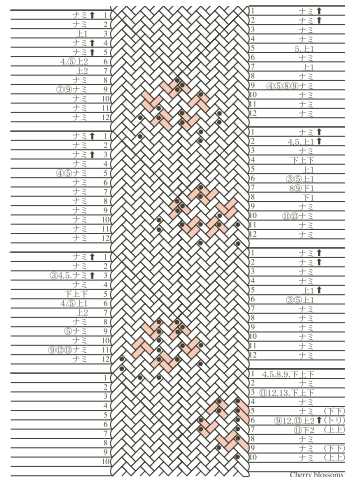


3-3-3と綾をとって1本の糸を通す。3間組ともいう。鏡の織などに用いられた。一枚高麗組より幅は狭く厚みが増す。止戈枢要に31玉（右16玉・左15玉）の3間組の記載がある。帯締めの場合：手持ち柄糸 20本×25玉



菅沼晃二郎「京くみひも」全京都組紐連合会 1978
 山木薫「くみひもの研究」総合秋学出版 1978
 「組紐」泰流社 1978
 土山弥太郎「組紐」私家版 1980
 「組紐」（「なごみ」54）淡光社 1984
 額田巖「ひも」法政大学出版局 1986
 多田牧子「組紐の歴史」（佐橋慶編「EXQUISITE」）講談社インターナショナル 1988
 松本包夫・今永清二郎「日本の美術・1」No.308 至文堂 1992
 木下雅子「日本組紐古技法の研究」京都書院 1994
 多田牧子「組紐総覧 1 丸台の組紐 120」テキスト 1996
 多田牧子「組紐総覧 3 高台の組紐 1」テキスト 1998

60玉二枚高麗組 小板1 Kozakura 1 60-Nimaki-Kourai-gumi



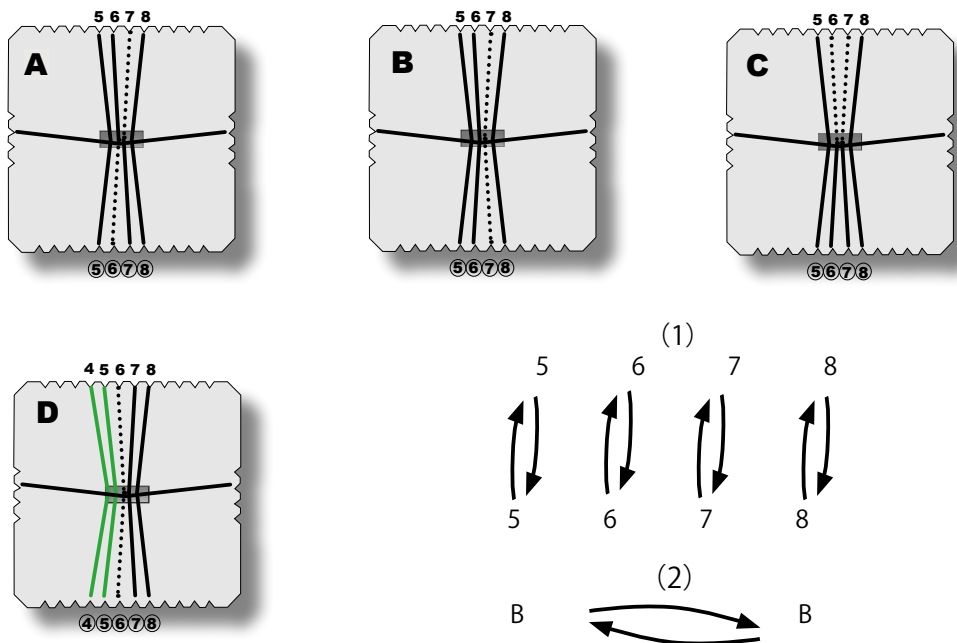
ワークショップ「綾竹台の紐をプレートで組む」小嶋博子



2013年5月26日京都で、7月13日東京で「綾竹台の組紐をプレートで組む」ワークショップが行われました。小嶋博子先生考案の少しねじれた素敵なグラスコードが簡単にできました。

綾竹台は織物にきわめて近い紐を組む、大きさが40～50cm四方程度の道具で、駿河台とも呼ばれています。綾竹台の前方の正面に高台と同じような小ぶりの鳥居があり、手前の横枠に、矢羽状の糸載せ「羽根」と、糸が隣の糸とからまないようにする「区分棒」が交互に45度くらい傾いて植えてあります。この糸載せに経糸の役目をする重り玉に巻いた組糸を掛け、そこに載せた組糸と木枠に載せた糸を上下させ、その間に緯糸の役目をする糸を毎段通します。この緯糸の役目をする糸を「くり糸」または耳糸とよびます。綾竹台で組むものは経糸と緯糸の区別がはっきりしています。ただし緯糸の役割をするくり糸が左右から1本ずつの計2本あり、これが交差するので組紐の範疇に入れられています。今回は緯糸は真直ぐに通し、かつ縦糸も毎段同じ方向に入れ替えて、緩やかにねじれた紐を作りました。

A,B,Cは10本組、チェーン（点線）を入れる位置で違う表情の紐ができます。Dは12本組です。横方向の糸は他の糸の2倍の長さが必要です。糸の動かし方は毎段同じで縦方向も横方向も(1)(2)の図の通り時計回りに入れ替えます。(多田牧子・小嶋博子)



第5回組物検定 京都

第5回の組物検定試験は2013年12月7～8日に京都工芸繊維大学で行われる予定です。本年度は1,2,3,4,5級の検定試験を実施します。

組物検定は、組物を社会に広め、組物技術の向上と発展、技術指導者の育成を目的として、組紐・組物学会が2010年度から実施している検定試験です。性別・年齢・学歴等の制限はありません。

検定基準となる各級の技術到達度および試験範囲は以下のとおりです。

■5級：丸台と角台の8玉、16玉。

組物の基礎的な技能と知識があるか。

■4級：丸台16玉、24玉。

組物について専門的スキルと知識があるか。

■3級：クテ打初級、綾竹台初級、丸台など。

組物について専門的スキルと知識を持ち、丸台で創作組紐を作るなど、応用能力があるか。クテ打：「秘伝系組」「真野家伝故實系組手附」から復元された手操作技法（基礎技法）現存指操作技法（3基本組紐）

■2級：クテ打中級、綾竹台、高台1枚物など。

組物について専門的スキルと知識を持ち、指導者の補佐ができるか。

クテ打：「秘伝系組」「真野家伝故實系組手附」から復元された手操作技法（基礎技法）から少しのみ出した基礎技法（鎌倉時代の遺品に用いられている技法）

なお2級を受験する方は以下の作品を実技試験の日にご持参下さい。

綾竹台作品3本以上

（2年以内に制作したものが望ましい）

高台1枚物作品3本以上

（2年以内に制作したものが望ましい）

提出作品をこれから組まれる方は房を付けない組みっぱなしで提出して下さい。

■1級：クテ打上級、高台2枚物、唐組台など。

組物について高度な専門的スキルと知識を持ち、指導する実力があるか。

クテ打：「クテ打組紐技法入門編 3基本組紐の組み方」、「クテ打組紐技法入門編 2 基礎技法」

「クテ打組紐技法入門編 3 追加基礎技法」、「クテ打組紐技法 連結技法」

なお1級を受験する方は以下の作品を実技試験の日にご持参下さい。

高台2枚物作品3本以上

（2年以内に制作したものが望ましい）

提出作品をこれから組まれる方は房を付けない組みっぱなしで提出して下さい。

昨年度は2・3・4・5級で、各級とも筆記と実技の試験が行われ、21名の方が受験しました。

筆記試験は獲得点数により判定します。昨年度の合格ラインは5級が70点（平均80点）、4級が80点（平均91点）、3級が70点（平均73点）、2級は70点（平均66点）でした。

実技試験は試験会場で組まれた作品をもとに審査員が判定します。間違いの有無、時間内に所定の長さに組まれているか、動作と出来映えの3つの観点からA, B, Cの3段階評価とし、A, Bが合格となります。

なお、今年不合格になった科目は、翌年にその不合格科目のみを受験して合格すれば、その級に合格することが出来ます。

受験を希望する方は、住所、氏名、電話番号、メールアドレスをFax、電子メールまたは葉書で学会事務局までお送り下さい。受験料は7350円（絹糸の材料費を含む）です。銀行振込または当日の現金払いも受け付けます。

組紐・組物学会事務局

京都工芸繊維大学大学院伝統みらい教育研究センター内
〒606-8585 京都市左京区松ヶ崎御所海道町

Tel/Fax: (075)724-7844、 E-mail: inoda@kit.ac.jp



2012年の組紐検定試験

ワークショップ 京都 2013-2014

ワークショップの予定は変更されることがありますので、学会のホームページで最新情報をご確認下さい。

■第2回ワークショップ&レクチャー

8月23日・24日 ワークショップ 10:00～16:00

「組紐ディスクでBraid-in-Braid」 多田牧子

■第3回ワークショップ&レクチャー

10月11日・12日 ワークショップ 10:00～16:00

「クテ打」 木下雅子

■第4回ワークショップ&レクチャー

12月6日・7日 ワークショップ 10:00～16:00 「検

定直前ワークショップ&レクチャー」 多田牧子

■第5回ワークショップ&レクチャー (2014年)

2月14日・15日 ワークショップ 10:00～16:00

「円形唐紐」 多田牧子

ワークショップ 東京 2013-2014

ワークショップが主で随時レクチャーをする予定です。

■第3回ワークショップ&レクチャー

9月14日 10:30～16:00 ワークショップ&レクチャー

「円形唐紐」 亀井三枝子、相原日出子

■第4回ワークショップ&レクチャー

11月9日 10:30～16:00 ワークショップ&レクチャー

「クテ打」 木下雅子

■第5回ワークショップ&レクチャー (2014年)

1月11日 10:30～16:00 ワークショップ&レクチャー

「組紐プレートでスイッチング」 多田牧子

■第6回ワークショップ&レクチャー (2014年)

3月16日 10:30～16:00 ワークショップ&レクチャー

「組紐プレートでコサージュ」 多田牧子



組紐・組物学会
The Kumihimo Society

役員

■会長

魚住忠司：村田機械（株）

■副会長

仲井朝美：岐阜大学工学部

小嶋博子：組紐研究家

■理事

上田隆久：日本ピラー（株）

大谷章夫：岐阜大学工学部

北村雅之：北陸ファイバークラス（株）

木下雅子：クテ打組紐技法研究会々長

倉谷泰成：（株）カド コーポレーション

多田眞作：（株）テキスト

多田牧子：組紐研究家

寺本 靖：（有）寺本文化財工芸社

濱田泰以：京都工芸繊維大学

濱中知子：ハマナカ（株）

廣澤浩一：三重県組紐協同組合顧問

圓井 良：圓井繊維機械（株）

渡辺一生：渡敬（株）

事務局

猪田宮子：京都工芸繊維大学

組紐・組物学会事務局

京都工芸繊維大学大学院

伝統みらい教育研究センター内

〒606-8585

京都市左京区松ヶ崎御所海道町

Tel/Fax: (075)724-7844

E-mail: inoda@kit.ac.jp

<http://www.kumihimo-society.org>

ご入会、ワークショップ、組紐検定、シンポジウム講演、作品・製品展参加のお申し込みはこちらをお願いします。

